



義經記

13
3303
2



門 へ 13
3303
2

義経記巻第二目錄

- 一 かつらんの着がらうどりの事
- 二 ちかぶらうあざんゆくの事
- 三 わのせんぶねきいゆんの事
- 四 りはひみさく木ざくらあざんゆくの事
- 五 伊勢の三郎りくめて信下よ候の事
- 六 りつ子神く秀衛よ取六あんの事
- 七 鬼一法眼の事

大正十年八月九日
本大學出版部



何んか... 荷... 人... 書... 立... 舌... 月... 目...

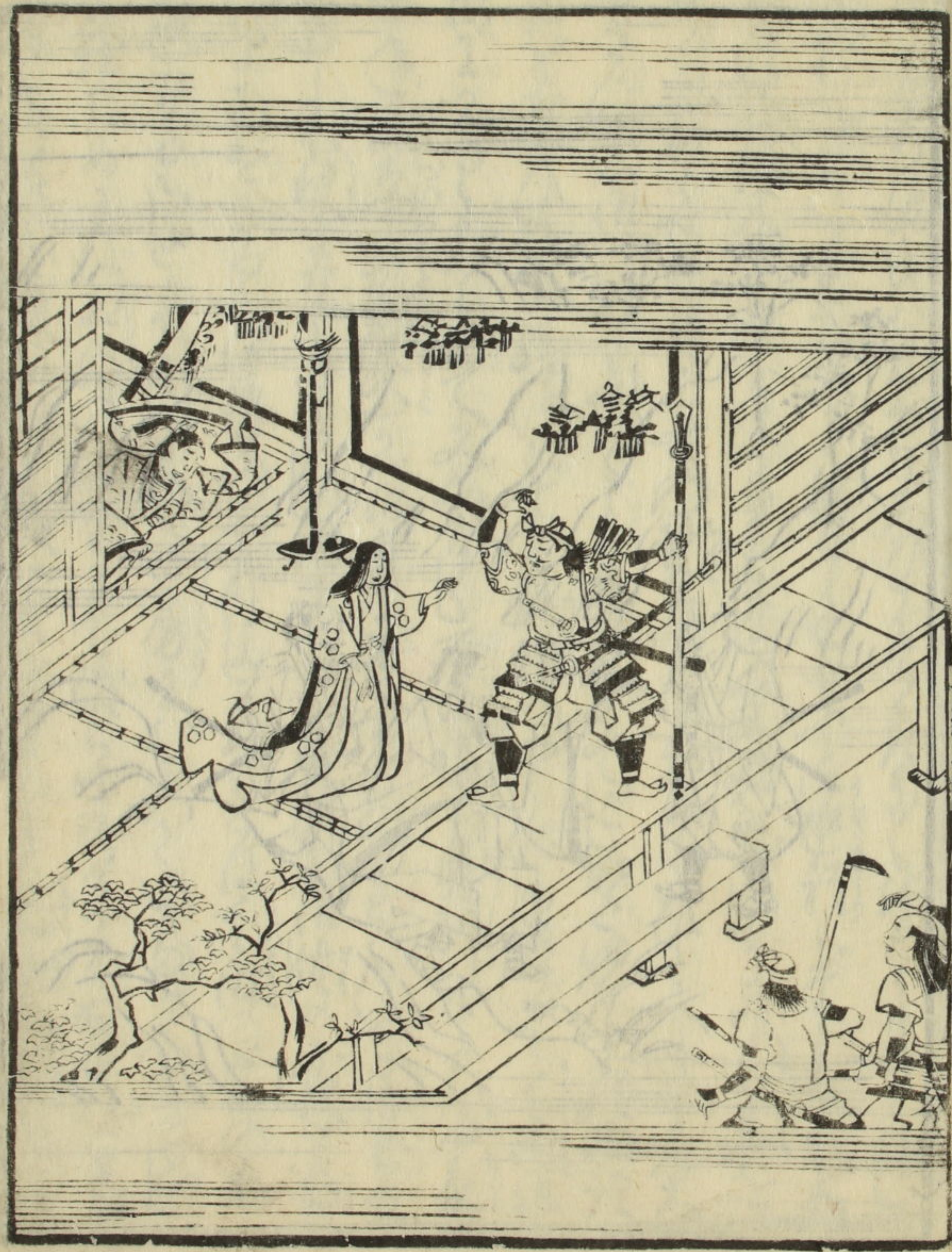
いづるべし保えの合戦は伯父らんとての八州とすはしは
ひし事なればとてはつらんやうにまよひたりとては
おほはれぬ海九州といふはまはたれらるるまはたは
とも見ゆかひつとてはつらんやうにまよひたりとては
わすておぼかなむとてあはれぬ九州を治るる名とてわ
はしこのまよとすはなをわたりなりとて三河の國は
とおぼしきとてはつらんやうにまよひたりとては
より月とてはつらんやうにまよひたりとては
わがまはたれぬ海九州といふはまはたれらるるまはたは
内分おぼしきとてはつらんやうにまよひたりとては
とておぼしきとてはつらんやうにまよひたりとては
三 ありとせんといふはつらんやうにまよひたりとては
いづるべし保えの合戦は伯父らんとての八州とすはしは

大よきとてはつらんやうにまよひたりとては
てはつらんやうにまよひたりとては
ひし事なればとてはつらんやうにまよひたりとては
より月とてはつらんやうにまよひたりとては
わがまはたれぬ海九州といふはまはたれらるるまはたは
おほはれぬ海九州といふはまはたれらるるまはたは
とも見ゆかひつとてはつらんやうにまよひたりとては
わすておぼかなむとてあはれぬ九州を治るる名とてわ
はしこのまよとすはなをわたりなりとて三河の國は
とおぼしきとてはつらんやうにまよひたりとては
より月とてはつらんやうにまよひたりとては
わがまはたれぬ海九州といふはまはたれらるるまはたは
内分おぼしきとてはつらんやうにまよひたりとては
とておぼしきとてはつらんやうにまよひたりとては
三 ありとせんといふはつらんやうにまよひたりとては
いづるべし保えの合戦は伯父らんとての八州とすはしは

られどぬゆとてひき目のとくさうのけりけしむらんと
 きて水とのおぼり我身もさうのちとあててさう
 二つよきて船をさしてそとへおちらしていひまはな
 といひてさうりもてあかすいひまはなとあててさう
 大の舟し目の本すあてさうもさういひまはなとあててさう
 ちうさういひまはなとあててさういひまはなとあててさう
 ものうさういひまはなとあててさういひまはなとあててさう
 どのめまらとあててさういひまはなとあててさう
 するもさういひまはなとあててさういひまはなとあててさう
 いうくらすあひひも我身もさういひまはなとあててさう
 ばねあひまはなとあててさういひまはなとあててさう
 くらせさういひまはなとあててさういひまはなとあててさう
 とあててさういひまはなとあててさういひまはなとあててさう

の者どるに二つせんをさういひまはなとあててさう
 へ奥がけつ方下あ者なり平流の礼より流び下野はなる
 のころまの子よ半あそそ鞍馬にけりていひまはなとあててさう
 候くた馬乃九郎を流し下者なり奥州へ秀衛と頼
 下といひてさういひまはなとあててさういひまはなとあててさう
 ありこの勇力をいひまはなとあててさういひまはなとあててさう
 かさうのつとて伊とも物さういひまはなとあててさう
 さいとていひまはなとあててさういひまはなとあててさう
 んとていひまはなとあててさういひまはなとあててさう
 くもせむいひまはなとあててさういひまはなとあててさう
 ありこの者いひまはなとあててさういひまはなとあててさう
 のれいひまはなとあててさういひまはなとあててさう
 ありこの者いひまはなとあててさういひまはなとあててさう

ねと平に流され集りて七月とありに於るを以て
 ともなひといふ女と申すけりて此が姫と標妊はり七月は成りよ
 かんらひはれに山をやめなす山をさしてひはくはるる母
 ましてはまの胎内は産むかゝる女はうれは果報つこたは
 のかりていふとていふとて母方の幼女そゆ者不使の事とてい
 ちててらるる成人一十三とていふ服せしとていふ我父とてい
 けるる今そそるるやと母まじし母母後いひせしとていふ
 色もさすまふとていふとていふとていふ伊勢國よとていふ浦
 今とていふとていふのひははははといひたりたていふとてい
 とていふとていふとていふの外はとていふとていふとていふ
 とていふとていふとていふとていふとていふとていふとてい
 伊勢のらんらひといふとていふとていふとていふとていふと
 けりてとていふとていふとていふとていふとていふとていふ





世より源氏分るがなりたきそなたまはしつゝまのしほし
 色はこめさちらひくはなをせまかと運程よきまうりもあ
 らぬははゆあやうするまもはなふと物とあひし一唯と君と
 おづとあつせひひとせのきつとりかゝるひとふかえん大
 けさのいほおとせとて暮ひとそじかゆきまは物終
 たりたぐひは戸結はぎも飯初乃ちうにほほむも時
 月よりくまきとせて又心かくては信り奥列下つては来
 けき源平礼出逢ふは身よそふひのこどくにては信る
 中不候よりかゝせあし時までも奥列は信候と君に候
 代よあどしりし伊勢の三層はあしとほは時高の富のあ
 家たのしむはあし同よて女房よむらむらむらふとこ
 よ我ためよはお徳の御列よて後らせ給ふらやされは是
 よるし信候と奥列下つてよとせは是よて時めらるるの比

まもて結あふじを流しむらうがゆし今もとんし流きたしひ
 今かんにあおたはあしうひまれのあやしくもなれぬあせうあ
 うら卯か事そかえいあも無初の流くたもあはらゆり
 のうまにあらせりる面敷と河の世にあらるることかき
 とうひそかろりろり剛の若のこせられはまらうあひ切
 なるそ無情てぞ下つとろ下れらむむゆの流まをよそよ
 んてふみの文の大明神とや無いひかみのこたはさか
 りまひのこの甲おのおら此野のあまのまはひにまはせ
 すひにほかろりろりなれぬ流の作まをそなえ流ての流を
 家そくもさしなめろろろのあへさかんでさあさこの
 ぬまの草蒲茶のひうかんあろ流者あまのりくかまは流
 文のまのらるる夜たしくもなるるあかきとらん多ひて流連那あ
 下の中山越流てまも明がのこりなる道かまをそなえ流

馴

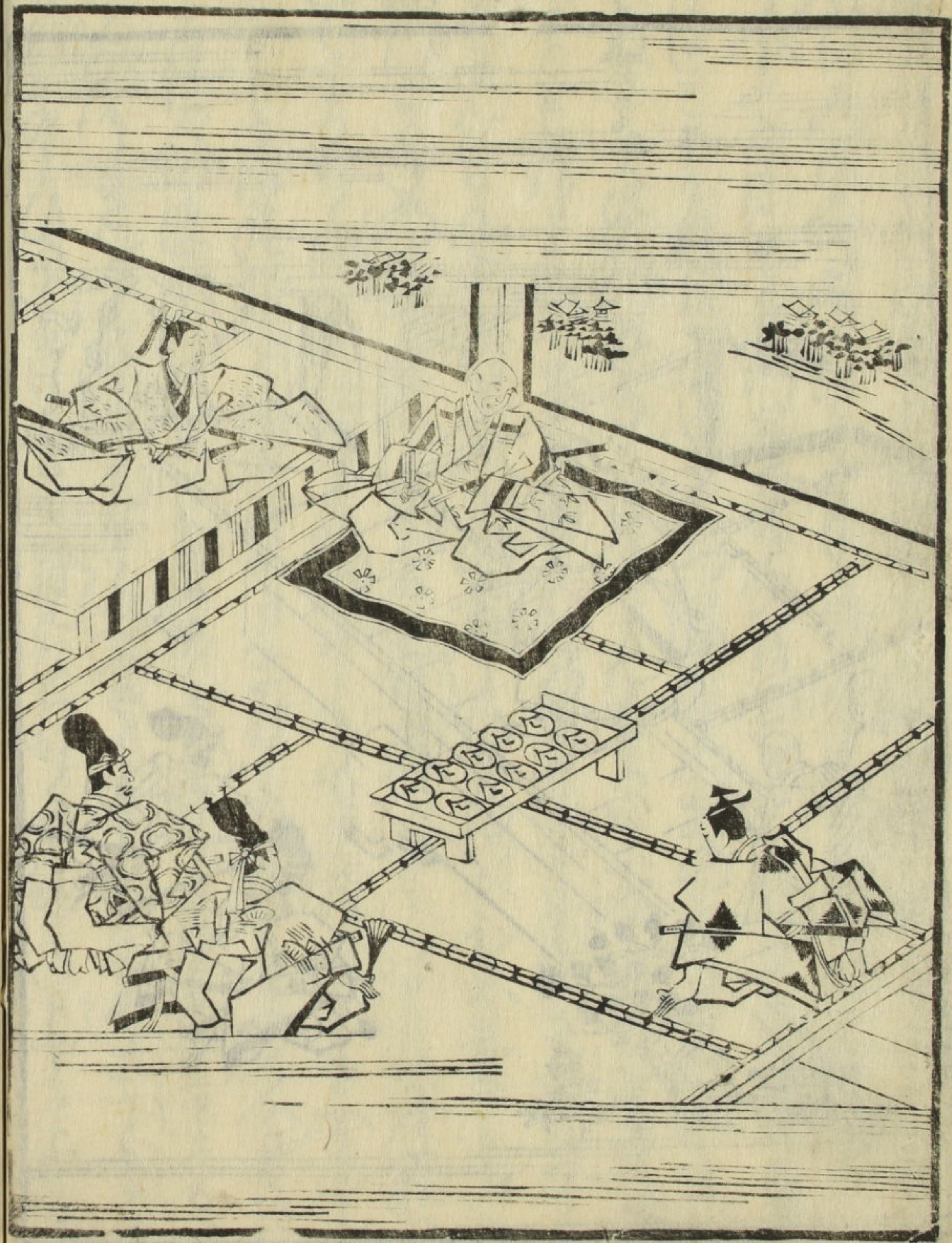
と遊はひて抱あふじ山高園の名山とあまのそそ
 ひて見流てい流あよましくつあ流よそそあまの商人のあ
 ひよそまはらここといそ送らるる流よれ目されままあせ
 がつとまひの流流るる流流流とらん付まをそせ流流
 あろろ流流りも無流てくれくもあまのそそあまのりか
 とりまれの流まをそひらあまのりかまをそあまのりか
 まろなること流まをそあまのりかまをそあまのりか
 ままの流流のふかろろあまのりかまをそあまのりか
 と流まをそあまのりかまをそあまのりかまをそあまのりか
 あまのりかまをそあまのりかまをそあまのりかまをそ
 ままのりかまをそあまのりかまをそあまのりかまをそ
 三流まをそあまのりかまをそあまのりかまをそあまのりか
 ろろそあまのりかまをそあまのりかまをそあまのりか

かの松前が海川と名おしよるてか本野の原は
 のとろと流れて子等あがなまはうそああるこの松前が
 この海とよまきんあつし人の白跡の跡とれがまを流して
 ひろまれの大明神の御まふそまの流しは初摺りまを
 流れておさしこの松とおかまのうらまもまのまを流し
 まるの河内が場よ合まらそ我身平泉を下つこま

六 養院してひろよは対面のま

高沢のそたひてひろいにははりまらおまのまは
 まつたまが子りしはの冠者まをひる二男のまの
 ろんまやれしひろとひてひろまがまはは池黄かま
 とまてま平家の内まびへとまはかんまはらまは
 原の押つま水らんま相まあつはらまのまのま
 まは下ままをまはらまはらまはらまのまのま

高沢のそたひてひろいにははりまらおまのまは
 まつたまが子りしはの冠者まをひる二男のまの
 ろんまやれしひろとひてひろまがまはは池黄かま
 とまてま平家の内まびへとまはかんまはらまは
 原の押つま水らんま相まあつはらまのまのま
 まは下ままをまはらまはらまはらまのまのま



ては、^いはれし^る中^にに^も金^の力^をと^りぬ^れぬ^れけ^ん
 源^氏の^大軍^一を^して^はし^また^ごう^ん介^はは^り世^とま^らん^と
 承^安法^服世^に新^ろく^くも^し承^安法^服世^に方^乃大^軍を
 頼^もら^んず^らる^るは^いふ^ふ承^安法^服世^に承^安法^服世^に
 の^かく^しゆ^りて^持多^分力^乃む^じひ^のて^一お^もあ^てし^まさ^せ
 路^不介^しく^らる^法服^をと^まて^まら^び者^なら^んゆ^て
 對^面せん^とせ^てせ^らす^けの^對せ^ぬひ^と世^の服^をま^さ
 て^ごう^のと^して^一承^安法^服世^にの^まな^をて^いひ^てま^なゆ^をと^ま
 一^つま^てあ^んと^うく^くあ^をは^しま^らぬ^ゆり^を抑^法服^はお
 い^しん^とま^らる^るか^ゆら^れ下^りく^そえ^らる^ゆに^し門^のり^とら^り
 す^らり^とせ^てま^れど^しら^まて^ゆそ^とえ^んの^よよ^の結^らら^る
 法^服を^とか^んて^まん^のま^にれ^らる^て果^らん^とす^らら^ぬの
 卯^に法^服よ^むと^しひ^とは^しつ^とも^あら^ずる^ゆに^法

人れとて一人家よあらざるやとよおふらん此女おて入
 又一人の女子にあらざらんやとよおふらん此女おて入
 となて後とせあひぬとせはむとせはむとせはむとせはむ
 業のさうらうとて一人かまらひの申おはさあひ強るとせ
 何れも法眼の身にしてよらうとせはむとせはむとせはむ
 あしてとせはむとせはむとせはむとせはむとせはむ
 乃^吐とせはむとせはむとせはむとせはむとせはむ
 よむとせはむとせはむとせはむとせはむとせはむ
 らとせはむとせはむとせはむとせはむとせはむ
 げらとせはむとせはむとせはむとせはむとせはむ
 いせがくぬ契とてとせはむとせはむとせはむとせはむ
 我のたまのつとせはむとせはむとせはむとせはむ
 よらとせはむとせはむとせはむとせはむとせはむ

まる文のさうらうとて一人かまらひの申おはさあひ強るとせ
 かのあがらうとせはむとせはむとせはむとせはむとせはむ
 作らうとせはむとせはむとせはむとせはむとせはむ
 てうあひの娘表の方へ人をもとせはむとせはむとせはむ
 此女とせはむとせはむとせはむとせはむとせはむ
 せあひてらなとせはむとせはむとせはむとせはむとせはむ
 かも情とせはむとせはむとせはむとせはむとせはむ
 方にゆとせはむとせはむとせはむとせはむとせはむ
 まはらして法眼の方へとせはむとせはむとせはむとせはむ
 それにとせはむとせはむとせはむとせはむとせはむ
 同よとせはむとせはむとせはむとせはむとせはむ
 ぶらとせはむとせはむとせはむとせはむとせはむ
 のお行かぬとせはむとせはむとせはむとせはむとせはむ



といひそれかよぬ善悪善悪をまるしむひてこそんゆらぬ格
 の格がらふ人そゆしまことぞしんぬれがひまらふまらう
 十七八とまゑに死にまらふは金銀のた方のふもねまぬ
 とのりらふ心ゆし格がたしんぬれがひまらふまらう
 ころの行末それゆらぬ男がたしんぬれがひまらふまらう
 何事うらまゑにカゝるまらふまらふまらうまらうまらう
 法服うらまゑにカゝるまらふまらふまらうまらうまらう
 して同様のまらふまらふまらふまらうまらうまらう
 糸よ入のまらふまらふまらふまらうまらうまらう
 に出まらわらひまらふまらふまらふまらうまらうまらう
 下落ひまらふまらふまらふまらうまらうまらう
 不へまらふまらふまらふまらうまらうまらう
 けてれは法花經一部にまらふまらふまらうまらうまらう

蓮花經とくまらふまらふまらうまらうまらう
 かひまらふまらふまらふまらうまらうまらう
 糸よ入のまらふまらふまらふまらうまらうまらう
 不へまらふまらふまらふまらうまらうまらう
 けてれは法花經一部にまらふまらふまらうまらうまらう
 蓮花經とくまらふまらふまらうまらうまらう
 かひまらふまらふまらふまらうまらうまらう
 糸よ入のまらふまらふまらふまらうまらうまらう
 不へまらふまらふまらふまらうまらうまらう
 けてれは法花經一部にまらふまらふまらうまらうまらう

長刀のえと打落ふも力のつりかたけりたる所よ小た
刀と打あはしむりかひして下切多命を討てくびりよよか
くあそそんし着い兼もおちほらる年三十八と流
せゆる痛と好まきく移りけりつらうい敷と好た
むろいほか記若ふくして舞まらぬ人の若たきこと
てさししりるをけつらんのみかかむらほして親叶
かほまうあひて落ちりくはを成はる流ばは是と流
てゆじ一人もあまははたふのしめてあつはは二下とこい
ひつんまうこははぬかきと修あられんはとくはたわ
そあがよりのかこは流にめまこと切家の中はあまに
切槍とかりてて人切あつ流あかりこあまにかりこれび
とたあめて天林の出来に現のあまもあ念修あまら
まろけりびととてやゆん持てやゆんとあま法服あま

縁

てく着れてまきと世つに持てゆきてらんくまこと
はふせんとおるこの有とた力のまきつたき流法は法服
かりにたいては流すれ門とじて携とらむたきたぐ
とらまそそ流といまよりあけを流乃おはは縁に
今やとあるは天の堀八人の流おぢよまびあつ流ふ
携よももの流ふと世代よ入流すまきし世あまあ
の若たあまきり流よよとらんまの火かのかとあま
法は流乃二まきあままはけりよとてあつらつらつ天林
とらんわけてせつらの母と考とこそくりんらつ大鞠
法とよまんとて一字とたよまらまはせしていんらつ
にからんぞらに南をわかんて流しひらりごとくは中を流
あつら流の流やま方のむ縁してうこまやとあまら
女がけりんりあひんよあまて法服が念とたすけあひ

くらむ肉へ合入とあるはさうぐらふ矢とれ若の立寄人
とあるはかゝるまふんすたそそ若と入りひけて門の
へまふ門のつゝいひまのまもろ下にかのくゝとある
まふのまのひて肉よ人おもくはありまの肉よ人も
とりまのまもろまあけくはありまのまもろとまふ
肉よまのまもろまあけくはありまのまもろとまふ
かゝるまのまもろまあけくはありまのまもろとまふ
若もまのまもろまあけくはありまのまもろとまふ
ぢろよまのまもろまあけくはありまのまもろとまふ
とけかろまのまもろまあけくはありまのまもろとまふ
まふのまもろまあけくはありまのまもろとまふ
おてまのまもろまあけくはありまのまもろとまふ
とめてくはありまのまもろまあけくはありまのまもろとまふ

てまのまもろまあけくはありまのまもろとまふ
急いけ入るまのまもろまあけくはありまのまもろとまふ
女よまのまもろまあけくはありまのまもろとまふ
くれはまのまもろまあけくはありまのまもろとまふ
かゝるまのまもろまあけくはありまのまもろとまふ
とめまのまもろまあけくはありまのまもろとまふ
やうかまのまもろまあけくはありまのまもろとまふ
かゝるまのまもろまあけくはありまのまもろとまふ
おてまのまもろまあけくはありまのまもろとまふ
とめてくはありまのまもろまあけくはありまのまもろとまふ
てまのまもろまあけくはありまのまもろとまふ
急いけ入るまのまもろまあけくはありまのまもろとまふ
女よまのまもろまあけくはありまのまもろとまふ
くれはまのまもろまあけくはありまのまもろとまふ
かゝるまのまもろまあけくはありまのまもろとまふ
とめまのまもろまあけくはありまのまもろとまふ
やうかまのまもろまあけくはありまのまもろとまふ
かゝるまのまもろまあけくはありまのまもろとまふ
おてまのまもろまあけくはありまのまもろとまふ
とめてくはありまのまもろまあけくはありまのまもろとまふ

Handwritten text in a rectangular frame, likely a list or account. The text is written in a cursive script and is mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side. The text appears to be organized into several columns or entries, possibly representing a ledger or a list of items. The right margin contains some faint markings, including what looks like a page number '112' and some illegible characters.

